

# 「ことば」をいかに共有するか

## —「教科教育学の実践的展開」を担当して—

間瀬 茂夫（国語文化教育学講座）

### 要約

異教科間での協働において不可欠なのは、「ことば」の分かち合いである。同じことばでも、各教科の教科内容や、指導論の文脈によって、異なる意味で用いられている。例えば、教科教育学博士課程前期の選択科目「教科教育学の実践的展開」においては、「環境」ということばが、数学科、理科、家庭科、国語科の院生がそれぞれ異なる意味で用いて、各教科の特性を説明している場面が見られた。しかし、協働において重要なのは、そうしたことばの意味や使い方を一つの厳密な定義によって限定的に規定することではない。お互いの使い方や意味の差異がどこにあるのか、何に由来するのかを理解し合うことである。それを実現するのは、「対話」であり、協働する教師には、そうした「対話力」が求められる。授業における学習者の「対話的、主体的な学び」を保障するのも、そうした教師の「対話力」が基盤となる。

### I 異なる教科の教師が出会ったときの「ことば」

#### —「教科教育学の実践的展開」におけるエピソードから—

はじめて開講された今年度（平成 29 年度）の「教科教育学の実践的展開」において、各専修の院生が順番に各教科の独自性について発表し、議論する中で、次のような場面が生じた。

数学を専攻する院生は、数学的な世界以外の全ての事象を「環境」ということばで表現した。そこには、人間、自然、社会の全てが含まれる。

理科を専攻する院生が、自然科学の方法と、研究の対象である人間の外的な事象や外界を「環境」ということばで表した。そこには、人間の社会は含まれない。

家政科を専攻する院生が、「環境」ということばを用いて、人間生活において人間と関わる外界を表した。

それぞれの参加者は、それぞれの文脈で「環境」ということばを用いながら、質疑応答や議論が進んでいった。

「環境」とはどのような意味か。辞書には、次のようにある。

①めぐり囲む区域。

②四囲の外界。周囲の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界。自然的環境と社会的環境とがある。「恵まれた一に育つ」

（『広辞苑』第五版）

先の場面では、数学の院生は、①も②も含めて最も広い意味で用いている。理科の院生は、②のうち「自然的環境」の意味で用いている。家政科の院生は、②の「自然的環境」と「社会的環境」のどちらも含めて用いながら、両者の関わりを問題にしている。各教科の専門家になるということは、各人がそれぞれの領域で用いられている意味で例えば「環境」という用語を正確に用いることができるようになることを含む。

では、国語科ではどうか。まず、国語教育研究や国語科学習指導論においては、「言語環境」「読書環境」という用語によって、②の「社会的環境」のうち、学習者の周囲で用いられていることばの位相や、図書・雑誌・新聞の有無・種類・量などを指す。一方、国語科の授業においては、先のように「環境」ということばの漢字を覚えたり、辞書で意味を調べたり、類義語として次のようなことばを想起したりすることもある。

周囲 生態 外囲 事情 情況 コンテキスト

また、「読むこと」においては、その文章の中で「環境」ということばがどのような意味で用いられているかを考え、理解したり、適切に用いられているかを批判的に吟味したりする。国語科の専門家になるということは、例えば「環境」ということばの中核的な意義素が何で、それにどのような派生的な意義素が加わっているかを弁別できるようになることを含む。ときには歴史的な変化をとらえたり、ある分野や領域、個人による意味の違いをとらえたりすることもある。

## II 教科教育学専攻における本授業の意義と今後の課題

異教科間のコミュニケーションを進めたり、教科横断的なカリキュラムを構築したり、教科融合的な学習を進めたりするということを行う際には、こうしたことばの使い分けが必要になる。自分の教科におけることばの意味を絶対視したり、あらゆる場面で一つの意味での用い方に制限したりしては、横断も融合もできない。ある場面では、文脈に応じて使い分け、ある場面では、定義をして共通した意味で用いたり、敏感にかつしなやかにことばの用いることが必要となる。それは、ことばを曖昧に用いることではない。

では、そういうトレーニングの場がこれまであったか。

一般常識の範囲では、文章や本や新聞を読むこと、テレビやラジオでニュースを見聞きすることがそうしたことの日々のトレーニングになっていることは今更述べるまでもない。しかし、専門領域ではどうか。特に、教育という点では似ていながら、背景となる各学問分野という点ではことなる教科教育学や学校においては、そうした使い分けはかえって難しいのではないか。

そういう意味で、大学院という専門課程で、教科融合科目が設定され、そこで教員同士、院生同士が議論を行うというのは、「ことば」を共有する絶好の機会であると思われるのである。

今後の課題としては、そうした分析哲学的な視点、認識論的な視点そのものを共有するためのテキストなり、講義の回なりを設定することである。科学哲学の入門書をテキストとして設定してもよいのではないか。